

今朝は修行道場で雲水と呼ばれる修行僧が、食事の際に唱える「展鉢の偈」というお経についてお話しいたします。

食事の際、修行僧は、坐禅堂で坐禅を組み、応量器という器を用います。

応量器とは、量に応じる器と書きます。また、この器は鉢ともいい、お釈迦さまの時代から使われてきたとされています。修行僧一人一人が持つ大切な物で、大小様々な器が重なって、布で包んでいるものです。

展鉢とは重なっている応量器すなわち、鉢をひろげ、食事を頂く準備をすることで、

器を広げる前に「展鉢の偈」という、短いお経をお唱えします。

この「展鉢の偈」では、お釈迦さまの「カピラ城」でのご誕生から、「マガダ国」でのお悟り、「ハラナ」という町での初めての説法、「クチラ」という所でお亡くなりになる、すなわち涅槃に入られるまでのご生涯をお唱えします。

お釈迦さまが仏教をお広めになったことにより、今でもこうして修行が出来ることを感謝します。

そして、お釈迦さまの時代から代々伝わってきた応量器を用いて食事をすることが出来ることを深く感謝するのです。

その上で、食事を頂く人、与えて下さる人、食べ物そのもの、この三つが「空寂」、つまり執着が生じないようにと願います。もっと美味しい物を食べたい、人よりたくさん食べたいといった欲望からはなれて食事を頂くのです。

修行道場での食事は、食べたいから食べるとか、食べたくないから食べないというようなものではありません。常にお唱えや作法により、食事の意味を噛みしめながら頂戴しているのです。

普段何気なく食べている私達も、食事の前に「いただきます」、食後には「ごちそうさまでした」と手を合わせて、食べるという行いを感謝の行いにしていきたいものです。